

アイヌの頭蓋骨写真報道が意味するもの

——過去の「露頭」の発見と発掘——

東村 岳史*

The Meaning of the Articles that Reported Ainu Skull Bones:
Discovery and Excavation of “outcrop” of the Past

Takeshi HIGASHIMURA

Abstract

This paper analyzes newspaper articles from the late 1940s to 1960s reporting on the activities and achievements of physical anthropologists who studied the bones and bodies of the Ainu. The most famous/notorious scholar among them was Sakuzaemon Kodama, professor of Hokkaido University, who excavated numerous Ainu bones and preserved them as a collection for research. Newspaper articles favorably reported on the research while sometimes including photos of Ainu bones. After his death in 1970, Kaodama's conduct was severely criticized and some Ainu asked the university to return the bones. Although a 1983 newspaper article questioned the responsibility of scholars and the society that allowed researchers to excavate, the newspapers never acknowledged or retracted the reports they had published in the past encouraging and endorsing the excavations. It can be concluded that newspapers were a part of the society that supported the inhumane conduct of scholars and were responsible for the positive representation of the scholars.

1 はじめに——問題の所在

北海道大学に収集・保管されていた1000体強のアイヌ人骨の取り扱いが社会問題として表面化してきた1983年、北海道新聞の深尾勝子は「アイヌ人骨資料問題 / 北大は収集の内情調査せよ」と題する署名記事を書いた(『北海道新聞』1983.12.19)。経緯を簡単に説明すると、北大医学部教授として「アイヌ研究」に携わってきた児玉作左衛門らが地域住民の反対を押し切って人骨を発掘したり、あるいは「研究が終わったら返還する」との約束で人骨を持ち帰ったりしたのに、人骨は児

玉の死後(1970年)そのまま放置されていた。それを知ったアイヌの海馬沢博が、1980年に北大学長宛に問い合わせの手紙を送ったがらちがあかず、交渉の窓口は北海道ウタリ協会へと引き継がれた。この記事が出る前によく北大とウタリ協会の間で合意が成立、「返還要求のある地域には返し、残りは北大が納骨堂を建立・収納、イチャルバ(供養祭)を行う」という内容だったという。

この記事の中で深尾は、人骨収集の主たる責任者児玉作左衛門を北海道新聞が1961年10月に記事にした写真を再掲載し(図1参照)、「名誉教授となった児玉教授が机の上いっぱいアイヌの頭がい骨を並べ、背後の

*名古屋大学大学院国際開発研究科准教授

図1



棚にもぎっしりと頭がい骨を並べ、頭がい骨に取り囲まれたように座っている。長くは見つめられないような写真である」と紹介している。また、深尾は「この“アイヌ人骨資料問題”が、一人の学者や北大医学部、文部省の責任を追及し、反省を迫るだけにとどまらず、こうした学問のあり方を容認、推進してきた人々、社会の責任を問うことになる」よう調査委員会を設置することを提案している。

たしかに今日の私たちの感覚からいえば、頭蓋骨に取り囲まれた人物写真などグロテスクとしかいいようのない代物に見えるかもしれない。だが、本当にそうだろうか。この写真はなぜそもそも撮影されたのであろうか。そしてこれを撮影した記者や掲載した新聞社、そして読者はどのように感じたのであ

うか。

実は私はこの新聞記事を読んだ当初からかすかな違和感をおぼえていた。問題提起はもっともで良心的な記事である。ことは児玉の個人的な研究の「悪行」にのみ帰せられるような問題ではなく、彼の研究を許容・肯定していたであろう社会の方をも狙上に載せる必要がある、という主張は正当である。だが、私が1961年の頭蓋骨写真を同時代の読者として見た場合、「長くは見つめられない」という感覚を抱いたであらうか。私にはとても自信がない。また「こうした学問のあり方を容認、推進してきた人々、社会の責任を問うこと」とは具体的に何なのだろうか。

この件に関しては、①アカデミズムの責任、②マスメディアの責任、③読者の受容の問題、といった三つの領域にまたがる論点が

提示できるだろう。そして①に関する答えの一端は植木哲也『学問の暴力』（植木 2008）である。植木は児玉の人骨収集歴やそれを正当化する論理を丹念に暴いている。これは学問論からの深尾に対する回答の一例になるだろう（本稿で扱う新聞記事の背景説明としてもご参照いただきたい）。

対して私が行ないたいのは、「学問のあり方を容認してきた社会」の一部として新聞記事を取り上げ考察することである（②）。残念なことに、問題提起を行なった深尾自身が、「社会の責任」の一部として新聞報道を掘り下げて検証した形跡はない。いわば当事者意識が希薄なのである。ここでは戦後40年代後半から60年代にかけて、児玉やアイヌ人骨に関連する新聞記事を主な素材とし、その表象を検討する。

その前に児玉作左衛門の経歴をごく簡単に紹介しておく。1895年秋田県生まれ。1929年北海道帝国大学医学部教授として着任。1970年逝去。その間1930年代から60年代にかけて、北海道を中心に各地でアイヌ等の人骨収集を行ない、解剖学（形質人類学）資料として北大に保管していた。もっとも児玉は形質人類学に特化した研究ではなく、広く「アイヌ文化」一般を研究する「アイヌ研究」者として認知されていた。人骨とともに収集された副葬品や古物商から購入した衣服や装飾品等は「児玉コレクション」として死後博物館に寄贈されるなど、アイヌ文化財の保存活動にも積極的だった。名声も高く、1948年北海道新聞文化賞、1960年紫綬褒章、1965年北海道文化賞などを受賞している。

2 無意識に読者を飼い慣らす新聞記事

2.1 “偉大な研究者とその一家”を表彰する

私は戦前期の新聞については検索していないので、たまたま知った一例のみを紹介する。『北海タイムス』1938.5.7「愛奴研究資料 / グロな骸骨五百体 / 北大で保存骨庫新設」¹⁾ という記事では、棚に並べられた頭骨をバックに児玉の上半身が写っている写真が掲載されている。もっともここで見出しにある「グロ」は、大正末期から昭和初期の流行語「エロ、グロ、ナンセンス」の乗りで付けられているようで、「おぞましい」といった批判的な意味合いは特に感じられない。

管見では、戦後児玉に関連した最初の記事は、『北海道新聞』1948.6.18「骨格でアイヌの祖型探る / 北大伊藤助教授・石器時代を研究」で、この記事には「モヨロ人」と「アイヌ」の頭蓋骨一つずつが並んだ写真がついている。これは児玉の同僚伊藤昌一の研究を紹介したもので、児玉は「骨格からアイヌの祖型を研究しようとしたのは素晴らしい構想でその研究方法も正確であり、これで永年ナゾとされた本道先住民族の疑問が解けるように思われる」とコメントしている。そして児玉本人のこととして掲載される最初の記事は、『北海道新聞』1948.10.17「モヨロの発掘を終わって」と題する児玉の寄稿文である。そのすぐ後、1948.11.8「北海道新聞文化賞」は社会文化賞の受賞者として児玉を紹介するものである。「北方族研究の結晶」という小見出しのついた児玉の紹介文は、上述の伊藤昌一の記事とも関連があり、「モヨロ貝塚の研究は児玉教授が過去二十年継続してきた北方民族の研究の結晶であり、この研究の背後には

アイヌならびに石器時代人の民族学的研究が六十余編あつてこれらが基礎となつたものである」と児玉の研究蓄積を称えている²⁾。結論からいえば、最初から児玉の栄誉を称える記事が報道されたせいか、その後児玉の生前期に児玉を批判する新聞記事は管見では一切ない。

戦後初期にすでに北海道新聞からお墨付きを与えられたため、以後（以前はそうでないという意味ではない）児玉の動向を報ずる記事は、“偉大な児玉教授のその後”を広報する性格のものになっているものと思われる。深尾が問題視した記事も道新文化賞受賞者のその後を追つたものであった。『北海道新聞』札幌市内版1961.10.27「文化賞の顔①児玉作左衛門さん」は、北大定年退官後も研究室に通う児玉の「きちょうめんさ」を報じたものである。記事は児玉のみならず、「家族総がかり」で「アイヌ研究ひとすじ」に打ち込む様子を次のように紹介している。

トミ子夫人はアイヌ玉、お嬢さんのまり子さんがアッシ織りをそれぞれ自宅で研究、博士が“少し足りない”というアイヌの文化面の研究を続けているほか、北大医学部を出た三男譲次さんは解剖学教室に通つて研究中。『家族総がかりで、アイヌ民族の研究をすっかり完成しようというわけです』。からだはますますじょうぶ——と元気いっぱい。『趣味は別にないですね、アイヌのものをみるのが好きだから、趣味がそのまま仕事』というわけ。

深尾が言及した写真は、この記事に「研究に明け暮れる児玉博士」というキャプションを付して掲載されたものである。

さらに『北海道新聞』1963.10.8「道新文化賞受賞その後②北大名誉教授児玉作左衛門氏」も児玉の「学問的熱情」を以下のように紹介する。「人類学にはまったく未開の分野」に北大着任直後から取り組んだため、「児玉さんの研究はまず足でかせぐことだった。……道内に散在する遺跡を片っぱしから発掘することである。いや、道内ばかりではない。千島の占守島から樺太の鈴谷貝塚まで、めばしい遺跡はくまなく児玉さんの手にかかった」。「北大医学部にある“アイヌ資料室”をのぞいてみよう。おびただしい先人の頭がい骨に、まず目をみはるだろう。そして、もし美術品に興味のある人なら、青サビに鈍く輝く刀剣や、青、赤、茶と原始のいろどりを連ねた首飾り。その素朴な美しさに、思わずヒザをのりださずにはいられないであろう」。そして「教室、家族をあげて児玉さんを応援している」ため「児玉さんは幸福である」と。ここにも批判的のトーンは一切ないどころか、人骨に「目をみはる」記者は、「頭がい骨」と「美術品」を平気で併記している。

もし児玉の研究歴がこのように「総括」されるのであれば、そこに至るまでの児玉関連報道も当然翼賛的なものとなる。それらを列記すると、『北海道新聞』1949.1.25「“アイヌ民族研究史 / 北大児玉教授が近く脱稿”」、『毎日新聞』北海道版1950.11.9「アイヌ族の学術調査開始 / バ教授（米国）の依頼で北大医学部」、同1954.6.23「アイヌは白色人種である / 北大児玉教授、25年間の研究で結論」と続く。そして北大定年退官にあたっての「総決算」的な記事は、児玉自身が寄稿した『北海道新聞』1959.3.16「ドクロとともに / アイヌ研究の三十年」である。タイトルに「ドクロ」がついているところに、児玉自身の頭蓋

骨に対するフェティシズムがうかがえる³⁾。長文のせいもあって、児玉の研究に対する姿勢が随所にうかがえる興味深いものである。彼はこの一文で四つのエピソードを紹介している⁴⁾。

まず北大着任直後に樺太を訪れた際のことである。「ただ一つ遺憾に思ったことは、アイヌたちが研究者に対して極度な悪感情を持っていることであった。よく聞いてみると、数年前に京大の清野（謙次：引用者補足）博士が来栄浜付近の魯礼の部落で、アイヌたちに無断で新しい墓を五十数個掘り返して持ち去ったというのである。……わたしはこれを聞いて、こういうウソをついてアイヌたちをだますとは実に卑劣な行為であるし、また他の研究者が迷惑することがわからないのかと非常に憤慨し、かつ嘆かわしく感じた」という。「アイヌ民族には墳（ふん）墓を極端に恐れる観念がある」ため、「骨格を発掘するというのはほとんど不可能に近いと私はなかばあきらめていた」。

二つ目のエピソードは次のようなものである。「ところがようやく昭和九年になってはじめて、アイヌの骨格を多数発掘する機会が与えられた。それは八雲町のユウラップ浜の酋長椎久年蔵氏の牧場であるが、ときどき骨格が出るというので発掘を依頼されたのである」。ただしこの件では当初は児玉らの研究に無理解だった警察から取り調べを受け、弁明に努めた結果ようやく理解されるに至る。その後は「刑事課はアイヌの骨格の発掘に積極的な援助をしてくれるようになり」、「各地での発掘は急に増加し、また円滑に行われるようになった」そうである。

三つ目のエピソードは、幕末期の英国領事館員によるアイヌ人骨盗掘事件で、文書記録

から「この事件の真相を明らかにすることができたことをとてもうれしく思っている」。四つ目は、「千島アイヌ発掘」で、発掘後児玉は千島アイヌたちから『その骨格は祖先のものであるから全部返してくれ』という厳重な抗議を受けた。「わたしは八方手を尽してみたがなんら効果がなく、涙をのんでこれを返さざるをえなくなった」。ところが、返還前に慰霊祭を行なったところ、「式が終ると酋長はわたしのところへ来て、あの骨格は全部北大に寄贈するから大切に保管されたいと涙ぐんでいわれた。このときの感激は一生忘れることができない。終戦後この酋長は一度北大を訪れてくれたが『あのとき北大にあげておいたことが、本当によかったと思う』といて、感無量の面持で同胞の頭蓋を見つめていた」。これがこのエッセイの締めくくりである。

児玉が「依頼された」と書いている発掘の実情については植木（2008）を参照してほしい。ここで語られていることとして指摘したいのは、困難に直面しながらも誠実な対応によって道を切り開いてきた先駆者としての成功物語、という表象である。なかでも重要なのは、児玉が他の研究者の非倫理的行為を知り、それを批判していることである⁵⁾。すなわち、彼自身はアイヌたちの心情にも配慮して研究上の困難を克服した理想的研究者として自己表象している。同時に、タイトルの「ドクロ」とともに、「涙をのんでこれを返還せざるをえなくなった」というくだりにも、彼の「資料」に対する執心が顔をのぞかせている。とはいえ、最後の千島アイヌのエピソードを児玉自身の「感激」と被調査者の「感無量」で締めくくっている構成は、児玉を血の通った研究者として性格づけているのはたし

かであろう。このように彼に自己正当化の紙面を提供していることからしても、私は児玉関連の報道記事を広報的性格のものと呼びたくなるのである。

児玉自身が研究倫理に配慮した学識者として報道されている記事が他にもう一つある。『読売新聞』北海道版1964.7.23「アイヌの血液調査もめそう」で、ケンブリッジ大学の学生たちがアイヌの血液採取を希望しているものの、北大や行政機関は調査協力を消極的というもの。児玉は「学生たちには血液調査は非常にむずかしいと話しておいた。アイヌたちを一か所に集めるようなことはせず、一人一人に面接してほんとうの協力者を得るようにつとめなさい。それがうまく行かなければ他の民俗学的研究に重点をおきなさい、とすすめた」という談話を寄せている。すでに「ドクロとともに」で全面的に自分の営為を正当化している児玉にとっては朝飯前のコメントだっただろう。ともあれ、この文面からは、いかにも児玉の方がケンブリッジ大の学生に比べて調査対象とされるアイヌに配慮があるとしか読めない。

さらに、前述の記事でもふれられているように、賞賛されたのは本人のみならず、同僚・同業者や家族を巻き込んだのこともあった。これも記事を列挙してみると、『北海タイムス』1951.5.22「白雪姫のような人 / お父さんに似てアイヌの研究 / 作左衛門氏長女児玉まり子さん」、『北海道新聞』1955.1.29「努力の二十八年間 / 小卒だけで医学博士に 北大の大場氏」、同1955.6.14「“アイヌ民族の生態” / 北大児玉博士の研究 藤井氏、欧州で紹介」、『北海タイムス』1959.1.1「アイヌの人類学研究へ / 内臓など軟部解剖 / 札幌医大渡辺教授 世界で初の

こころみ」、同1964.2.19「札幌に『アツシ織り』の大家 / 児玉マリさん」、同1964.3.21「北海道おんな百人72滅び行く民族文化を愛す、アツシ織りの伝承者 児玉マリさん / 親譲りのアイヌ愛」、同1966.5.1「受賞に輝く三人の横顔 観光功労者 / 40年のアイヌ研究 / 父娘協力で一般に紹介」、など。最後の記事に関連して、児玉と娘が北海道観光大会で観光功労者として表彰された際には、「アイヌ服飾文化の研究家、おふたりそろると、アイヌ文化のすべてがそこにある」(『北海タイムス』1966.5.1「亜寒帯」)とまで書いたコラムもあった。そして『朝日新聞』北海道版1963.3.31「“アイヌ文化”保存に意見書」で児玉の談話が寄せられているように、彼は人骨のみではなく広く「アイヌ文化」一般にも通じた研究者としても認知されていた。『北海タイムス』1964.2.15「服装研究に貴重な資料 / タイムス博物館の『アイヌ喫煙図』」によると、問題とされている絵画の貴重さを「児玉北大教授が判定」とされている。このように、「ドクロ」のみならず、文化等「アイヌ研究」に多面的に関わる家族は理想の研究一家として表彰 / 表象されたのである。

2.2 人骨をネタ化する

児玉や関係者に関して新聞社が向けてきた好意的な視線は児玉以外の研究者の動向を紹介する記事でも基本的に同じで、やはり研究広報的な性格を持ち、人骨や人体を「貴重な資料」としてまなざす研究者の視線をなぞるものである。近年再度問題視されている人骨発掘の模様を報じた記事を列挙してみる。

『北海道新聞』1956.9.27「アイヌの墓地を調査 / 静内 混血状況などを究明」によると、「墓地埋葬状況調査のため北大医学部解

剖教室松野正彦氏ほか三名の一行」が「町当局および郷土研究会ケパウの会と打合せのうえ二十七日から一週間にわたって調査に当る」としている。「貴重な」という形容詞こそないものの、「日高アイヌの混血状況と静内川を中心とした南北アイヌの関係を明らかにするものとして注目されている」という書き方は、実質貴重視したものである。

『北海道新聞』1959.7.31「完全な骨格で／八雲でアイヌ墓地を発掘」は、札幌医大解剖学教室の三橋教授や埴原助教授、函館市立博物館の武内館長らの発掘の様を写真入りで報じたものである。「身許が確認されているアイヌの骨格は非常に少なく、とくに今回のように身許の確認された三代のアイヌ骨格が発掘されたのははじめてのことで、骨格遺伝学のうえからも貴重な資料とされている」という。

『北海道新聞』1961.5.30「完全な姿で発掘／百年前のアイヌの人骨」は、「いままで名寄地方でアイヌ人の完全な人骨はあらわれたことがなく人類学的にも貴重な資料になると郷土史研究会の人たちは大喜び」したとこれも骨格の写真入りで報じている。

『北海道新聞』1963.8.7「完全なアイヌの人骨／阿寒町遺跡 三百年前の一体発掘」も、釧路市立郷土博物館の学芸員らの発掘を人骨写真とともに紹介している。「道東地方で完全なアイヌ人骨が発掘されたのはこれまで網走市だけだったので、アイヌの埋葬様式、墓制の研究に貴重な資料として注目されている」。

『朝日新聞』北海道版1963.10.23「“貴重な人類学資料”／児玉博士語る アイヌ墓地発掘」も帯広の「伏古コタンは最も純粋なアイヌだ」という児玉の談から、「純粋」である

がゆえに貴重という紹介である(写真なし)。

『毎日新聞』北海道版1964.8.22「カラフトアイヌ? の遺体多数を発見／江別の墓地で」も、「北大の児玉名誉教授は「戦後カラフトアイヌ人の整った人骨が発見されたという例はまったくなく、この遺体を移葬する際、ぜひ研究材料として調査したい」と語っていた」という(写真入り)。

これらの記事は、決まり文句のように「貴重な資料」として人骨をモノ化している⁶⁾。各地の報道の仕方を感じられるのは、その地域でははじめての発掘・発見で地域特性を示すから貴重という持ち上げ方である。これは児玉の「アイヌは白色人種である」という主張を報じた記事(『毎日新聞』北海道版1954.6.23)にある、「体質に現われた地方差」を解明しようとする人種主義的視線とも合致する。このような持ち上げ方なら、各地でアイヌ人骨が発掘されればされるほど研究に役立つという論理しか出てこないだろう。「道内に散在する遺跡を片っぱしから発掘すること」の正当化は児玉以外の記事でも肯定的に適用される。児玉はその代表格ではあるものの、児玉のみのことではなく、他の研究者も新聞社も共犯関係である。

「体質に現われた地方差」は他の研究者によるさらなる分類や計測へと展開されていく。『北海道新聞』1967.2.15「アイヌには五つの型／伊藤北大教授が近く研究発表」は、「またことしは、一八六七年、英国のジョージ・バスクがロンドンの学会で“エゾ噴火湾のアイヌ”の骨を持ちかえって初めてアイヌの存在を発表してから百年。その百年を飾る成果としても関係者は暖かい拍手を送っている」と書いている。児玉でさえ問題視した英国人の盗掘がここでは単に百周年を記念する

ものとして回想されている。『北海道新聞』1967.6.10「千島アイヌ人骨計測進む 函館で札医大埴原教授」は、「これまで計測の結果が学会に発表されたのは昭和五年ごろ、京大の清野謙次教授が四体、同十年ごろ北大の児玉作左衛門名誉教授が九体ほど調べた二例があるだけ。今回の計測は、いずれ埴原助教授の手で学会に発表され、アイヌの人類学的研究に貴重な資料を付け加えることになる」と研究の進展を祝している。

では次に、深尾が問題視した、頭蓋骨写真のある新聞記事が意味することをもう少しくわしくみてみたい。比較のために、児玉と頭蓋骨という組み合わせだけではなく、児玉と他の事物が写っているもの、児玉以外の人物と人骨が写っているもの、などを、上述した記事も含めて抜き出し表にしてみた。

一覧を見ると、頭蓋骨・人骨写真は頻繁に現われているとまではいえないが、くりかえし登場しているのは事実である。問うべきは、頻度よりも写真がどのように用いられ意味づけられているかであろう。

まずは再度深尾が問題視した当の記事から見よう。前述のように、この記事の写真には単に「研究に明け暮れる児玉博士」というキャプションが付されている。この写真を深尾が「長くは見つめていられないような写真である」と述べたのはアングルのせいもあるだろう。写真の下半分（前面）に頭蓋骨が並んで置かれてクローズアップされ、頭蓋骨の上（後ろ）に児玉の顔が浮かんでいるような構図は悪趣味とさえいえるかもしれない。しかし深尾がグロテスクさを感じているのは構図のせいだけではないだろう。「背後の柵にもぎっしりと頭がい骨を並べ、頭がい骨に取り囲まれたように座っている」のに平気な、

児玉の感覚自体が“信じられない”といったところではあるまいか。ところが上述の記事のように、児玉自身は人骨に囲まれているときに充実した時間であり、「愛着と尊敬の念」をもって接しているのである。また、それを報じる記事も、児玉の「愛」を賞賛しこそすれ批判は一切ない。写真はそのような文脈で用いられているのである。

1954年に天皇夫婦、1958年に皇太子が来道、児玉の研究室を訪問した際も写真つきで報じられているが、主調は「学究の徒としての「人間天皇」(『北海タイムス』1954.6.23「北大も平穏なお迎え」)、「学究皇太子」(『北海タイムス』1958.6.24「お疲れ見せず早速ご見学」)の「アイヌに深いご関心」(『北海道新聞』1958.6.24「教授とも一論争」)である。いずれも児玉と天皇・皇太子が柵に並んだ頭蓋骨をバックに話している様子を撮っている。どの写真も前面には刀剣も写し出されていることから、頭蓋骨は研究室にある多くの資料の一つとしてしかとらえられていないのではないか。知的な天皇・皇太子と児玉の「学究」に役立つものである、という表象がこの場面では重要なのである。

それでもなお、“頭蓋骨写真など気味が悪い”という感覚を抱く読者はいるかもしれない。それを相対化するような記事もある。『北海道新聞』1961.7.24「はなしの縁台⑧死体置き場 松野正彦さん」である。松野は北大医学部第一解剖教室（児玉は第二解剖教室）教授で、静内のアイヌ墓地発掘を行なったこともある人物である（『北海道新聞』1956.9.27「アイヌの墓地を調査」）。記事の内容は医学部で解剖実習用に使われる遺体の「清潔さ」を述べたものでアイヌには関係ないが、写真では柵に並んだ頭蓋骨を背景に「アイヌの

表1 頭蓋骨等写真掲載新聞記事一覧

| 新聞・日付 | タイトル（執筆者） | 写真説明（「キャプション」） |
|-----------------|---------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 北海道新聞1948.6.18 | 骨格でアイヌの祖型探る | 「モヨロ人」「アイヌ」1体ずつ |
| 北海タイムス1954.8.23 | 北大も平穏なお迎え / 天皇 アイヌ文化に深い関心 | 「北大医学部で児玉教授からアイヌの頭蓋骨の棚を背にアイヌ文化財の説明をきかれる天皇陛下」 |
| 北海道新聞1955.1.29 | 努力の二十八年間 / 小卒だけで医学博士に 北大の大場氏 | 「アイヌ標本室」で頭蓋骨を手にした大場 |
| 北海道新聞1955.6.14 | アイヌ民族の生態 / 北大児玉博士の研究 藤井氏, 欧州で紹介 | 「スライドの一部 “アイヌ人の頭骸骨”」 |
| 北海道新聞1957.8.12 | アイヌ美人を研究 / 楽しいサイド・ワークと張切る / 渡辺氏 (話の泉) と児玉教授 | 頭蓋骨（本物かレプリカかは不明）を載せた机の両側に児玉と渡辺 |
| 北海道新聞1958.6.24 | 教授とも一論争 / 皇太子さま アイヌに深い関心 | 「児玉教授から本道の発掘物やアイヌ文化について説明を聞かれる皇太子さま＝北大医学部第二解剖学教室で」バックの棚に並べられた頭骨 |
| 北海タイムス1958.6.24 | お疲れ見せず早速ご見学 / 学究皇太子の一面躍如 | 「北大児玉考古学教室で児玉教授より説明をきかれる皇太子殿下」, 背景同上 |
| 北海タイムス1959.1.1 | アイヌの人類学的研究へ / 内臓など軟部解明 / 札幌医大渡辺教授 世界で初のこころみ | 臓器らしい標本容器を前にした渡辺 |
| 北海道新聞1959.3.16 | ドクロとともに / アイヌ研究の三十年（児玉作左衛門） | 「慶応元年、箱館駐在の英国領事館員が落部村で発掘し、大問題をひき起したアイヌ頭蓋骨」 |
| 北海道新聞1959.7.7 | 科学者訪問@牛川原人を発見した鈴木尚さん | バックの棚に頭骸骨の列、手にも頭骨の鈴木 |
| 北海道新聞1959.7.31 | 完全な骨格出る / 八雲でアイヌ墓地を発掘 | 人骨と「遺体を発掘中の埴原助教授と武内博物館長」 |
| 北海道新聞1960.10.29 | 頭ガイ骨・頭脳の権威 / 紫綬褒章を受ける児玉博士 | バックの棚に頭骸骨の列、手にも頭骨？の児玉 |
| 北海道新聞1960.12.18 | 研究三十余年の成果 / アイヌ標本室の児玉博士 | 織物・副葬品・土器などで埋められた部屋（頭骨はなし） |
| 北海道新聞1961.5.30 | 完全な形で発掘 / 百年前のアイヌの人骨 | 頭骨なしの人体骨格 |
| 北海道新聞1961.7.24 | はなしの縁台⑧死体置き場 松野正彦さん | 「アイヌの頭がい骨を手に語る松野さん」 |

| | | |
|------------------------|---------------------------------|-------------------------------------|
| 北海道新聞（札幌市内版）1961.10.27 | 文化賞の顔①児玉作左衛門さん | 深尾が問題視した記事と写真 |
| 北海道新聞1961.11.19 | ミイラの幻想 / つきぬ人間の悲劇（児玉作左衛門） | 「「ミイラ展」に陳列された中国の高僧「無際上人・石頭和尚」のミイラ像」 |
| 北海道新聞1961.12.17 | 北海道のカラー②アイヌの刀掛け帯（児玉作左衛門） | 刀掛け帯（頭骨はなし） |
| 北海道新聞1961.12.26 | アイヌ起源解明に光り / 札幌医大山口講師 人骨系列化に成功 | 「山口講師と発掘された北海道先史人の頭ガイ骨」 |
| 北海道新聞1963.8.7 | 完全なアイヌの人骨 / 阿寒町遺跡 三百年前の一体発掘 | 「無キズで発掘された約三百年前のアイヌ人骨」（頭骨含む全身） |
| 北海道新聞1963.10.8 | 道新文化賞受賞者その後②北大名誉教授児玉作左衛門氏 | タマサイを手にした児玉（頭骨はなし） |
| 朝日新聞北海道版1964.2.12 | 有名無名⑬児玉作左衛門氏 / アイヌ研究の権威 | 頭骨を手にした児玉 |
| 毎日新聞北海道版1964.8.22 | カラフトアイヌ？ の遺体多数を発見 / 江別の墓地で | 「発見された頭がい骨の一つ」 |
| 北海道新聞1964.12.17 | 民族史解明に新資料 / 道内・ことしの発掘調査から(大場利夫) | 「伊達町高砂で発掘された人骨」 |
| 朝日新聞北海道版1965.9.9 | ギリヤーク物語⑧アジア族の大ロマン | 棚の頭骨をバックに手にも頭骨の児玉 |
| 北海道新聞1967.6.10 | 千島アイヌ人骨計測進む 函館で札幌大埴原助教授 | 「千島アイヌの頭骨を計測する埴原助教授(中央)」 |
| 北海道新聞1969.10.21 | アメリカ大陸とアイヌの起源(山口敏) | 「アメリカの古いインディアン骨」 |

頭がい骨を手に語る松野さん」が写されている。記事の中で「ホトケさまたちは完全殺菌されています。清潔そのものですよ」と語る松野の言葉と、「アイヌの頭がい骨」とが結びつけられれば、遺体・遺骨を“平静に”眺めてみようという呼びかけととれるかもしれない⁷⁾。

別種の相対化もある。『北海道新聞』1957.8.12「アイヌ美人を研究 / 楽しいサイド・ワークと張切る / 渡辺氏（話の泉）と児玉教授」を見ると、頭蓋骨はお笑いのネタのように扱われている。この記事の写真では、

児玉と「話の泉」という番組の出演者・渡辺が机の両側に座って談笑し、その机の上に頭蓋骨が置いてある。この頭蓋骨が本物なのかレプリカなのかはわからないが、「アイヌ型美人を発掘, 研究」という人種主義的発想（お笑いとはいえ）に結び付けられて頭蓋骨が表象されている——読者は頭蓋骨写真から「アイヌ型美人」の骨格を連想するだろう——のは、発想がグロテスクといえる。

これらの二例は他に類例もなく、頭蓋骨写真は話題づくりとしてたまたま動員されただけかもしれない。ただ、私がいいたいのは、

これらの例も含め、頭蓋骨写真がくりかえし紙面に登場したからには、新聞社にはそれらの写真の使用を問題視する姿勢は当然なく、また読者からの批判もおそらくなかったであろうということである。冒頭で述べたように、私が当時の読者だったとして、これらの写真を見て問題視したとは思えない。仮に一瞬“気味が悪い”と思ったとしても、松野のような記事を見て“そんなものか”と思ってしまうかもしれない。

上述のように、(アイヌの) 頭蓋骨(だけ)が特に注視されたことはなく、特に児玉の報道・表象に関連しては、他の研究資料と並列的に意味づけられていたと考えてもはずれてはいないだろう。児玉の研究室を写した写真には、アイヌの頭蓋骨が写っているものと写っていないものの両方がある。たとえば『北海道新聞』1961.12.17「北海道のカラー②アイヌの刀帯」には頭蓋骨はなく一面「刀帯」だけであるが、記者も児玉も、「刀帯」も人骨も同じように研究にとっては重要な資料としてとらえられているものと思われる。つまり、「刀帯」写真(それだけでは問題ないかもしれないが)と頭蓋骨写真の両方を同じようなキャプションを付して並べられた読者は、そのようなものとしてとらえてしまうのではないか。人骨が収集された来歴は脱文脈化されてしまう⁸⁾(というよりは説明もない)か、あるいは説明されたとしても児玉自身の文章のように正当化されてしまうかである。

アイヌの頭蓋骨写真に一番多く登場したのはやはり児玉である。また「ドクロとともに」「サレコウベ感懐」と題した文章を寄稿したことからして、頭蓋骨(写真)は児玉のトレードマークとでもいべきものとなってい

たといえるかもしれない。しかし、くりかえしになるが、児玉の場合「ドクロ」は彼の「アイヌ研究」表象と正当化の一部としてとらえられていた。さらに、児玉に関する記事以外に範囲を広げれば、アイヌ人骨・頭蓋骨写真が掲載されている記事は他にも散見される。深尾が言及した記事ほど頭蓋骨がクローズアップされているものではないにせよ、頭蓋骨や人骨写真を見て「長くは見つめていられない」という感覚は当時希薄だったのではないかと推察される。

拙著(東村 2006: 第1章)でも論じたように、1960年代に『現代のアイヌ』(菅原 1966)というルポルタージュを著した朝日新聞社の菅原幸助は、研究者たちに対するアイヌの評判がすこぶる悪かったと本では記し、さらにエピソードとして、ある大学教授が地元住民の反対を押し切ってアイヌ人骨収集を強行したことを紹介している。しかしながら、菅原自身、実際に児玉を取材する段になると、彼を肯定的筆致で紹介する側に回るのである。菅原も含め、権威主義に取り込まれたのか、当時の新聞記事が読者に直接伝えるメッセージとして「アイヌ研究」の問題点を報じたものは、おそらく存在したとしてもごく少数であろう。

単行本のもとになった連載記事中では、ここでも児玉が棚に並んだ頭蓋骨をバックに、そして一つの頭蓋骨を手に取りながら語る写真が掲載されている(『朝日新聞』北海道版1965.9.9「ギリヤーク物語⑧」)。「三万年前のインディアンやアイヌの旅、一万年前のエスキモーやギリヤークの旅、それを追って進んだオロッコ、ツングースたちの民族移動は想像するだけでも人類一大ロマンだ」と菅原はいい、「児玉教授は目をキラキラ輝かせて語

り続ける。たっぷり二時間にわたる大講義である。先生一人、生徒一人にしては、まことにもったいないほど、楽しく有意義な話だった」とふりかえる。自在に持論を展開する児玉のインスピレーションの源が頭蓋骨にあるかのような象徴的写真である。児玉にとって、頭蓋骨を手にした姿は気味が悪いと思われるから敬遠するどころか、わざわざ好んで撮ってもらいたかった構図なのであろう。

3 過去の「露頭」を再発見する

以上が戦後児玉が生きていた同時代の記事内容を分析した結果である。研究者と新聞社の共犯関係は明らかであろう。「科学技術ジャーナリズム」(cf. 林・瀬川・谷川編 2009)としてのチェック機能はまったく果たされていない。これを踏まえて、深尾の新聞記事が1983年になって現われたことの意味を考えてみたい。

1970年代から80年代冒頭にかけて、深尾の記事が登場するまでの期間の新聞記事について述べると、1975年までの各紙を検索したかぎりでは、アイヌの人骨写真を掲載した記事は見当たらない。したがって70年代以降の読者にとっては、深尾が紹介した1961年の記事はほとんどはじめて見る写真かもしれない。その場合、記事で深尾が述べるように、「長くは見つめていられないような写真である」という紹介に同意する人の方が多い気がする。

しかし、時間軸をもう少し長く取ってみれば、このような写真は70年代以降に忘却されたものにすぎない。もし私が長年の北海道新聞の読者で、児玉ら「アイヌ研究」者関連の記事をスクラップブックにでも保存してい

た熱心な読者であれば(そんな読者はまずいないだろうが)、“かつては結構こういう報道があったのに、いまごろになって何を騒いでいるのか”ぐらいに思ったかもしれない。それが見慣れないものであるかのように受けとられたとすれば、精神分析用語を流用して言えば、社会的に好ましくないものとして「抑圧」されたのである。

時間の堆積を地層になぞらえると、二層構造のイメージである。児玉ら研究者の活動を報じた記事が載っていた時代を第一層(1940年代-60年代)とするなら、その上に乗った第二層(1970年代以降)には研究者賛美や頭蓋骨写真を掲載した記事はないかごく少なくなる。研究者批判が前面に出てきた時代には、過去の研究者賛美は不名誉な記録となるからである。第二層が上に乗ったことによって、第一層に含まれていた遺物(記事)は見えなくなっていった。もっともそれは計算づくで隠されたというよりは、研究者賛美ではない記事が堆積して結果として層が厚くなり、下の層が見えなくなったものであろう。ただ、人骨問題そのものが解決されたわけではないから、アイヌたちの抗議活動により、社会問題という「症状」として現われる。その際に、一つの新聞記事(写真)が象徴(症候)のように見出された。あるいは「過去の時間(記憶)が時間の断層や褶曲によって「露頭」を見せ」(原田 2009:13)たものといえるかもしれない。

その「露頭」が何を意味するのかは、考古学のように「露頭」周辺を覆い隠しているものを取り払ってみないとわからないだろう。本稿で私が同時代の他の新聞記事を探し出して比較検討したのがそれにあたる。深尾の記事は、私に「露頭」のありかを教えてくれる

手がかりとなるものであった。ただ、深尾自身は新聞社や記者を「社会の責任」の主体として自覚的にとらえる姿勢は薄かったように思う⁹⁾。

唐突に思われるかもしれないが、ここで私はフロイトの「不気味なもの」の図式を持ち込んで解釈してみたい。精神分析の手法を文芸作品の分析に応用し、現代の文芸批評でもしばしば言及される論考である。フロイトの用法では、「不気味な (unheimlich)」ものとは「馴染みの (heimlich)」ものに起因する。「不気味なものとは、内密にして一慣れ親しまれたもの、抑圧を経験しつつもその状態から回帰したものである」(フロイト 2006: 42)。かつては「慣れ親しまれたもの」がいったん「抑圧」により忘れ去られた後で、「意図せざる反復というこの契機のみが、さもなければどうということもないものを不気味に」する(同:31)。深尾が例の写真に対して抱いた「長くは見つめていられないような」という感覚と「不気味なもの」はニュアンスが違ふし、それほど頻りに紙面に登場するまでにはいいがたい頭蓋骨写真を「慣れ親しまれたもの」と等しいというのも強引であろう。にもかかわらず、本稿の件とフロイトの図式には親和性があるように思う。深尾の記事(写真)への言及の仕方が、全体像を見渡したものというよりは不意に発見した「露頭」のみを見ているものように思われるからである¹⁰⁾。また、頭蓋骨写真のみならず、児玉らの研究活動を報じる記事全般に範囲を拡大すれば、研究者賛美は読者にそれなりに「慣れ親しまれたもの」といえるからである。前述の二層構造でいえば、第一層の同時代には「慣れ親しまれたもの」であった記事が、第二層が堆積して「抑圧」されることによりいったん忘却

され、「意図せざる」形でたまたま見出されたときに「不気味なもの」として目に映ったということである。

フロイトの「不気味なもの」概念をメディア論へと展開したキットラーの議論を援用することによって、「不気味なもの」論を両義性(慣れ親しまれた / 不気味な: 引用者補足)の議論からディスクールの問題へと引き上げ、さらにメディアの精神分析が可能になる」と姜竣はいう。「キットラーによれば、精神分析史はメディアの歴史とパラレルな関係にあり、そもそもメディアは私たちの幻覚、すなわち「幽霊」しか写さないものなのだ。なぜなら、「不気味なもの」とは、われわれの精神が自らの分身を恐怖の対象として切り離しながら、自我を幻視する心的メカニズムのことであり、その自身と分身ドッペルゲンガーのコミュニケーションの物質的な基盤こそが記号やメディアであるからだ」(姜 2007: 21-2)。

「不気味なもの」の両義性という点では、かつて頭蓋骨写真や研究者の行状が好意的に報じられていた時期においては、それらはもちろんポジであった。しかし後年振り返ってみると非人道的行為というネガに評価が変わる。ただ、非人道的側面をかつてはそう見なかったというにすぎない。一方、後年になってただ児玉の悪行としてのみネガティブに評価する見方も、かつてどのように社会的に好意的に評価されていたのかという側面を忘れていいる。「不気味なもの」はおもしろがって見れば「おもしろいもの」にもなりうるのである。それを後年になって「われわれの精神が自らの分身を恐怖の対象として切り離して「不気味なもの」として扱うのだ。同じものもかつては好意的にあるいは好奇のまなざしでながめていたという意味では、まさしく

社会の「自らの分身」であり、自分たちが生み出したものの影におびえているのである。その産出と忘却（切り離し活動）に手を貸した主体の一つは、疑いもなく新聞社である。深尾がまず気づくべきであったのは、かつての新聞記者のまなざしと自分のまなざしとの違いであり、「慣れ親しんだもの」が「不気味なもの」へと変容していった過程を検証してほしかったと私は思う。

本稿の冒頭で述べたマスメディアの責任という観点からいえば、児玉作左衛門とアイヌ頭蓋骨の報道/表象は彼の学問的権威を支えていた社会の一部である。それは全体として意図的に操作されたというよりは、無自覚的に児玉の権威を賛美し以前の記事の論調に追従することによって堆積されていった。児玉や同業者たちへの賛美は「慣れ親しまれたもの」になっていったのである。そうであるならば、本当に「不気味なもの」とは、人の尊厳に関わる事柄を単なる物質/ネタとして飼いつくしてしまう社会の方であり¹⁾、それを問題と感じず無意識に受容し、あるいは時に突然気づいたかのように騒ぎ立てる私たち（＝和人の記者および読者大勢）の感性なのかもしれない。

北大はじめ各大学・施設に保存されているアイヌ人骨の扱いはいまだに解決を見ていない。現在「アイヌ政策推進会議」において国の施設として建設が検討されている「民族共生の象徴となる空間」の中では、研究と人骨の慰霊を行なう機能を合わせ持った施設を作る構想がある（アイヌ政策推進会議「民族共生の象徴となる空間」作業部会2011）。これについては今後の進展を注視する必要があるが、ここではそれとの関連で、もう一度以前

の報道を参照しておきたい。児玉の業績を称えたある記事は、その後の動向をはからずも予言したものとなっており、不気味である。「同教授の教え子の中から、すでに百五十人の博士が生まれ、これらの人々の協力で集まった多くの資料は、今後数十年間学者が研究を続けても骨や文献に困らないほどだという」（『朝日新聞』北海道版1959.3.20「アイヌの骨と三十年」、強調引用者）。「今後数十年」はまたくりかえされるのであろうか。そしてこのような記事が再び過去の「露頭」として発見されるのであろうか。

付記：本稿は、筆者の第77回日本社会学会大会報告「アイヌ人骨と「アイヌ研究」者の表象——児玉作左衛門と新聞報道」（2004年11月20日、於熊本大学）に、科学研究費補助金（課題番号22530541）の成果を加え、大幅に修正したものである。

なお、本稿脱稿（2012.8.24）後、3人のアイヌが北海道大学を相手どり遺骨の返還と慰謝料の支払いを求める訴訟を札幌地方裁判所に起こし（『北海道新聞』2012.9.15「「遺骨返して」北大を提訴」ほか各紙）、現在係争中である。

注

- 1) 「昭和十年の末頃には研究室の壁は八雲、浦幌、森、落部などの頭蓋骨ですっかりうまってしまった」（渡辺 1971：4）。
- 2) ちなみに同時に科学技術賞を受賞した同じく北大医学部の上野正吉の業績については、「人類学的研究としてはアイヌ民族が欧州系であるとし学会に波紋を投じた」とある。
- 3) さらに児玉は、再び『北海道新聞』1962.1.12「サレコウベ感懐」でこう述べている。「私は研究室でサレコウベとともに四十年の月日を過ごした。この間かぎりない愛着と尊敬の念をもって

- これに接してきた。サレコウベに対しているときは、いちばん楽しかった」。
- 4) これらのエピソードは後年さらにくわしく述べられている(児玉 1971)。
- 5) ちなみに児玉は別の文章でも他の研究者の行状を批判している。「北大の研究者たちはアイヌ民族に対して頗る友誼的な慎重な態度をとっている。これに反して北海道に来る学者の中には、アイヌ民族の感情などは全然顧慮しないで、たゞ研究と資料蒐集のみを目的に来る人があるので、現地の学者はその後仕末のために非常に迷惑を蒙つたり、また研究上の障害をうけたりすることがあることを知った。それでこのアイヌの研究、中でも骨格の蒐集など、いうことは決してなま易しいことではないし、殊に開学以来日の浅い医学部にアイヌの骨格標本が少いということは、相当な理由があることを痛感したのであった」(児玉 1953: 38-9)。
- 6) 「貴重な資料」として報道されたのは人骨のみではなく体全体である。人骨より頻度は少ない(扱う研究者が少ないからか)ものの、次のような記事もある。『北海タイムス』1959.1.1「アイヌの人類学研究へ/内臓など軟部解剖/札幌医大渡辺教授 世界で初のこころみ」は、北大出身で児玉の弟子にあたり、戦前平光吾一に教えを受けたという渡辺の研究を次のように紹介している。「現在、顔面筋、血管、頸筋、胸筋、腹筋、神経、感覚系統などについて研究が進められているが、いままでつかみ得なかつた日本人との遠近関係、日本人に同化しつつあるアイヌの体の構造、体質などの一覧表がうかびあがるなど、非常に貴重なデータがでている」。渡辺が「アイヌ民族をとりあげたのは、すでに日本人と同化しつつあるのでいま研究しなければ永久にチャンスがないこと」が理由だそうである。「内臓など軟部」をどのようにして収集したのかは説明されていない。
- 7) 児玉ら研究者たちからすれば、人骨を気味悪がったり、人骨収集の来歴を問題視したりする感覚はなかつたのだろう。「夜おそく、研究につかれてふりむいた壁一杯の頭蓋骨が、それぞれちがった表情をもって、何か私に語りかけてくるようにさえ感じたその時の印象は未だ私の脳裏に鮮明に刻みこまれている」(渡辺 1971: 4)。
- 8) 発掘過程の問題に関する情報が与えられていなければ、単に頭蓋骨写真だけを見て、読者に「長くは見つめていられない」感性による批判的読解を期待することは無理である。たとえば、『北海道新聞』1959.7.7「科学者訪問⑩牛川原人を発見した鈴木尚さん」にもバックの棚の頭蓋骨の列の前に手にも頭骨の人物写真がある。構図だけ見れば児玉らがアイヌの頭骨を持って立っているのと変わりがない。両者を分けるのは古人骨(であれば無条件に発掘してよいというわけではない)か近現代の人骨かという違いのみである。「牛川原人」の頭骨を“気味が悪い”というだけでは、個人の慣性/感性の問題にされてしまうだろう。
- 9) くりかえしになるが、深尾の記事はそれ以前あるいはそれ以後の人骨関係報道と比べても良心的なものである。彼女は、砂沢クラ『クスクップオルシベ』の連載を担当、本にまとめる時に「あとがき」も書いており、山本多助『イタクカシカムイ 言葉の霊』の編纂にも関わっている。記者としてアイヌ民族にかなり積極的に関わった人物であるといえる。誤解のないようにいえば、私の批判は深尾個人に向けられたものというよりは、新聞社が過去の報道を検証しない傾向一般に対してである。
- 10) 深尾がどのようにして1961年の児玉の写真入り記事を検索(発見)したのかは不明だが、同時代の他の記事には言及しておらず、断片的である。
- 11) やや脱線気味の話になるが、1995年から2011年にわたって日本各地で開催され多くの観客を動員した「人体の世界(人体の不思議)展」にはそのような危険性がはらまれていたといえよう(末永2012)。その点では、アイヌの人骨・人体に対する扱いのみが突出して悪質というわけでもない。

引用文献

- アイヌ政策推進会議「民族共生の象徴となる空間」作業部会。2011。「民族共生の象徴となる空間」作業部会報告書。
(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainusuishin/shuchou-kukan/houkokusho.pdf>) (最終アクセス: 2012.8.23)
- 植木哲也。2008。『学問の暴力——アイヌ墓地はなぜあばかれたか』春風社。
- 姜竣。2007。『紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代』青弓社。
- 児玉作左衛門。1953。「色丹アイヌとパヒニダの

- 思い出』『北大季刊』4: 38-42.
- . 1971. 「緊急を要したアイヌ研究——私のあゆんだ道」『北海道の文化』21: 7-13.
- 小林宏一・瀬川至朗・谷川建司編. 2009. 『ジャーナリズムは科学技術とどう向き合うか』東京電機大学出版局.
- 末永恵子. 2012. 『死体は見世物か——「人体の不思議展」をめぐるって』大月書店.
- 菅原幸助. 1966. 『現代のアイヌ——民族移動のロマン』現文社.
- 原田達. 2009. 「亡霊の記憶, 亡霊の夢」『Becoming』23: 3-42.
- 東村岳史. 2006. 『戦後期アイヌ民族—和人関係史序説——一九四〇年代後半から一九六〇年代後半まで』三元社.
- 渡辺左武郎. 1971. 「児玉先生の思い出——戦前のアイヌ墳墓発掘のことなど」『北海道の文化』21: 3-6.
- フロイト, ジグムント (藤野寛訳). 2006. 「不気味なもの」『フロイト全集17』岩波書店: 3-52.
- (Freud, Sigmund. 1919. "Das Unheimliche," *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften* V: 297-324.)